

アクティブ・ラーニングに関する意識調査と分析

赤堀 侃司

教育テスト研究センター・日本教育情報化振興会

抄録

アクティブ・ラーニングは、次期学習指導要領の重要な概念であるが、本研究では、主に以下の内容について調査した。1つは、大学生が小中高等学校の授業を振り返って、アクティブ・ラーニングをどう受け止めているかの調査であり、他方は現職の小中学校の教員への調査である。両者を比較した結果、大学生と現職教員共に、アクティブ・ラーニングを好意的に受け止め、思考力などの育成や授業の活性化に役立つと、考えている。また、現職教員の方が、大学生よりも期待感は大きく好意的である。さらに、大学生に、小中高等学校の授業を振り返って、最も印象に残っている良い授業と嫌いだった授業を、自由記述で調査した結果、良い授業の60%は、アクティブ・ラーニングに関連しており、嫌な授業は、授業方法が一方通行などの要因が45%と最も高く、この意味で、アクティブ・ラーニングは、学習者にとって意味ある授業方法であると言える。但し、大学生は、講義やグループ活動などの授業形態ではなく、いかに興味を引き出し、知的な満足感が得られるかを、最も重視しているため、アクティブ・ラーニングの概念については、議論する必要がある。

キーワード： アクティブ・ラーニング、授業方法、学習指導要領、主体的、対話的、深い学び

1. 研究の背景

アクティブ・ラーニングは、次期学習指導要領のキーワードの1つであり、多くの単行本、論文、解説記事などの文献で、紹介されている。したがって、その背景をここで述べることは避けるが、その定義や特徴については、本研究を読むために必要な内容なので、紹介したい。但し、文献の所在を記すことは、膨大な紙幅を要するので、本研究では、最小限の文献の引用や参照に留め、その他は割愛することを、始めにお断りしておきたい。

1. 1 アクティブ・ラーニングの定義

さて、アクティブ・ラーニングの定義であるが、中央教育審議会の用語集を、引用したい（中央教育審議会、平成24年8月28日）。

「アクティブ・ラーニング」

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

この定義で十分と思われるが、よく知られている文献として、ボンウェルとアイソンが、その特徴について、いくつか挙げている（Bonwell, C.C. and Eison, J.A., 2017）。

・単なる受け身の聞き方でなく、参画すること

- ・情報を伝えるだけでなく、学生の技能を発展させること
- ・(ブルームのいう、知識・理解だけでなく)、高次の認知思考(分析、総合、評価)を促すこと
- ・読む、議論する、書くなどの活動に参加していること
- ・自分自身の態度や価値を探求することを、重視すること

など、その特徴を述べている。また、アクティブ・ラーニングを阻害する要因として、伝統的な授業観に束縛されている、従来の教育方法を変えることへの不安、固定化された教員の役割へのこだわり、などを挙げているが、大学の講義を振り返ってみると、納得することが多い。また、松下佳代らは、アクティブ・ラーニングの定義や特徴について、言及している(松下佳代、2015)。

アクティブ・ラーニングの用語は、先に述べた中央教育審議会の答申が元になっているが、次期学習指導要領では、別の用語として、つまり「主体的・対話的で深い学び」として、表現されている(小学校学習指導要領、中学校学習指導要領、平成29年3月公示)。

1.2 アクティブ・ラーニングの特徴

アクティブ・ラーニングの研究では、ゲームなどの多様な方法の紹介、子どもらによるプレゼンテーションへのルーブリック評価の導入などもある。ゲームではないが、ロールプレイなども、児童生徒らによるプレゼンテーションの形態と考えれば、多様な活動がある。児童生徒や学生が中心になる活動では、評価が難しくなるので、ルーブリック評価は必須の評価方法であろう。また、端的に、教師から子どもに主体が移るという観点は、わかりやすいアクティブ・ラーニングで、山本崇雄の「教えない授業」という枠組みは、確かに端的であり直感的に訴える力がある(山本崇雄、2016)。

フィールドワークやサービスラーニングなども、アクティブ・ラーニングに強く関連している活動である。フィールドワークでは、例えば海外短期研修から、野外学習、教育実習など幅広いが、主体的に活動しなければならない。また、教育学部の学生が、学校などに出かけて、教員の補助をしたり、教材の作成をしたり、工学部の学生が福祉のために必要な製品を開発したり、商学部の学生が商品の広報の支援をしたりするサービスラーニングも、学生が能動的に取り組まなければ、成立しない。

また、PBL(Problem Based Learning)などの問題解決学習も、アクティブ・ラーニングに密接に関係している。子どもたちが主体的に能動的に関わることは、何らかの課題意識が必要で、単に活動しているだけでは、目的と異なる。また、批判的思考力を育成することも、アクティブ・ラーニングの目的に関わる。一段と高い立場から見ると必要があるからである。

「主体的・対話的で深い学び」における「深い学び」は、概念があいまいであるが、アクティブ・ラーニングは、「深い学び(ディープ・ラーニング)」になっている必要もある。ブルームの教育目標分類における高次の認知能力としての、分析能力や批判的能力に加えて、設計する能力(デザイン思考)も、関係するであろう。

アクティブ・ラーニングは、さらにオンライン学習とも関連が強い。今日では、自宅でも電車の中でも、タブレットPCやスマホなどを使って、いつでも、どこでも学習光景を見かけるが、これは強制的にさせられているのではなく、自主的に学習している、つまりアクティブに、能動的に学習しているのである。教師が指導するのではなく、子どもたちが主体的に学ぶ道具としてのICTの活用も、注目したい(マイケル・B・ホーン、ヘザー・ステイカー、2017)。

反転学習も、その意味では、アクティブ・ラーニングの形態の1つとも言える(ジョナサン・バーグマン、アーロン・サムズ、2014、赤堀侃司、2015)。

以上のように、学習形態、資質能力、認知や行動、学習環境、ICTなどの道具、評価方法など、多くの要因が関わっていると言える。

2. 調査方法と実験協力者の特性

2016年10月に、東京都内の大学生60名（男子学生30名、女子学生30名）を対象に、実験の協力を依頼した。実験協力者の学力レベルは顕著な差はなく、その特性は、以下の通りである。

- ① 文系の学生は77%、理系の学生は23%で、文系の学生の率が高い。
- ② 学生特性のアンケートを実施した。その結果、以下のような特徴が見出された。
 - ・反省する大学生が多い・
 - ・話し方のうまい講義が好き
 - ・グループ活動よりも、知的な講義のほうが良いと思っている
 - ・知的なグループ活動よりも、興味のあるグループ活動が好き
 - ・表現することや自己紹介は、苦手

アクティブ・ラーニングは、どちらかというところ、グループ活動のような授業形態をイメージするが、大学生は、むしろ知的な講義を好むようだ。この意味では、アクティブ・ラーニングは、授業形態というより、内容に意味があると思われる。また、大学生の特性として、自己紹介や表現することは苦手で、自分を反省することが多い。これは、国際学力比較のデータからも、自己肯定感が低いことでも、うなずける。国立青少年教育振興機構の高校生国際比較調査（平成27年8月）では、「自分はダメな人間だと思うことがある」という調査では、日本72.5%、米国45.1%、中国56.4%、韓国35.2%で、日本の高校生は、他国に比べて、きわめて高い割合で、「そう思う」と回答している。

本研究における具体的な調査項目と、回答結果を、以下に示す。図1のグラフは、「どちらかというところ、はい」と回答した%を示す。

「大学生の特性調査」	「はい」の割合 (%)
1. あなたは、他人の考えを受け入れるほうですか	82
2. あなたは、自分で考えることが好きですか	83
3. あなたは、人前で話をすると充実感がありますか	57
4. あなたは、自己紹介が好きですか	45
5. あなたは、よく反省することがありますか	90
6. あなたは、思ったことはすぐに言葉にしますか	45
7. あなたは、一般的に大学の講義は好きですか	52
8. あなたは、一般的に大学授業でのグループ活動は好きですか	45
9. あなたは、知的に深い講義は好きですか	72
10. あなたは、話し方のうまい講義は好きですか	100
11. あなたは、知的な話しのできるグループ活動は好きですか	60
12. あなたは、興味のある話ができるグループ活動は好きですか	97

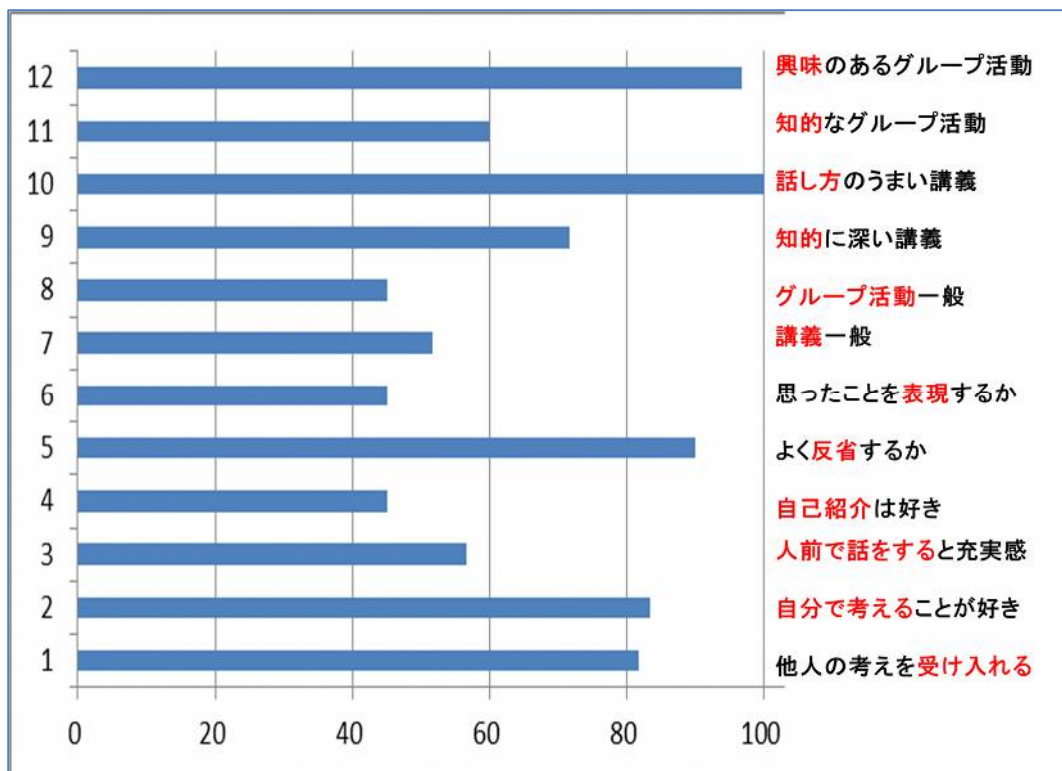


図1 実験協力者（都内の大学生 60名）の特性

3. 大学生と現職教員へのアクティブ・ラーニングの調査

以下では、いくつかの調査項目にしたがって、結果を示す。

3. 1 大学生と現職教員との比較

大学生 60名と小中学校の現職教員 128名を対象にして、アンケート調査した結果を、以下に示す。なお、小中学校の現職教員は、2016年に Web によるアンケートを実施した。

表1 「アクティブ・ラーニングの調査」

小学校から高等学校までの授業を思い出して教えてください。

1 いいえ 2 どちらでもない 3 はい

調査項目	「はい」の割合 (%)	
	学生	教員
17. アクティブ・ラーニングは、探究心や思考力が育つ	80	95
18. グループ学習などでは、授業が活発になる	58	80
19. ICT を活用したアクティブ・ラーニングの実施は、日本の将来に不可欠だ	52	74
20. アクティブ・ラーニングには、綿密な指導計画が不可欠だ	75	73
21. アクティブ・ラーニングは、学生が意欲的になって、学習効果が高い	63	72
22. 小学校では、すでにアクティブ・ラーニングを実施している	48	66
23. グループ学習などでは活発だが、結果として知識が定着しない	24	17
24. アクティブ・ラーニングの実施には、自宅で予習させることが必要だ	40	8
25. グループ学習などでは、教室が騒がしくなって、授業が成立しにくい	28	5
26. アクティブ・ラーニングは、時間がかかるので、あまりやるべきでない	8	4
27. 日本では、どのようにしても、アクティブ・ラーニングの実施は無理だ	2	2

その主な結果をグラフで、示す。なお、グラフでは、「はい」と答えた%を示す。青色のグラフは大学生の回答を、赤色のグラフは、小中学校の現職教員の回答を示す。

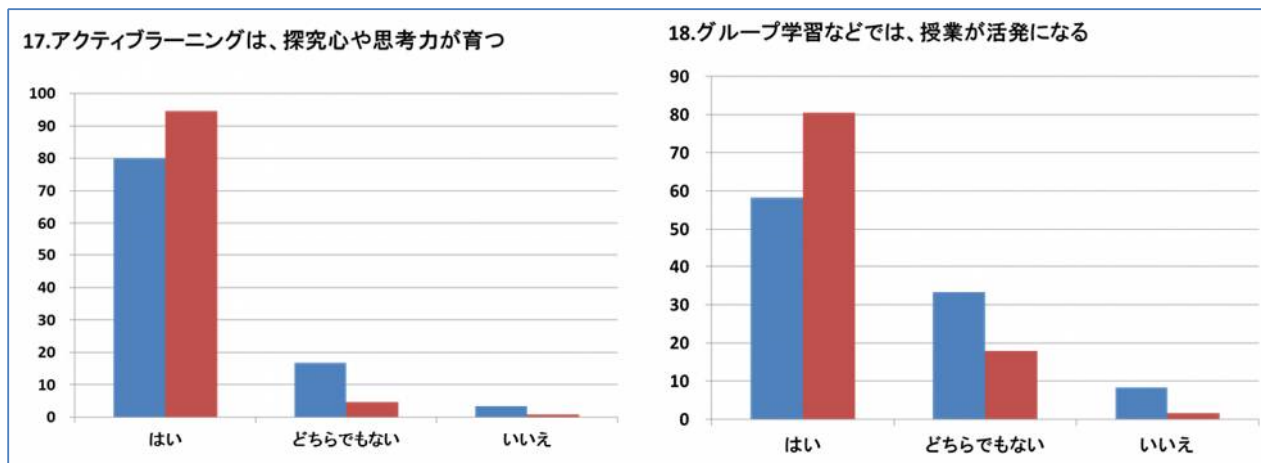


図2 17. アクティブ・ラーニングは、探究心や思考力が育つ
18. グループ学習などでは、授業が活発になる

図2から、アクティブ・ラーニングは、ほとんどの大学生と現職教員は、探求心や授業の活性化に役立つと回答している。また、その割合は、大学生よりも、現職教員のほうが高い。

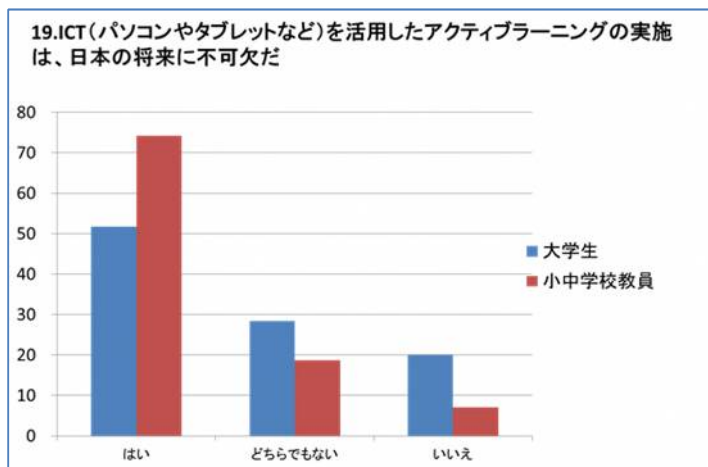


図3 19. ICT を活用したアクティブ・ラーニングの実施は、日本の将来に不可欠だ

アクティブ・ラーニングに ICT の活用は必須だという回答では、現職教員は 70%以上が賛成し、大学生は 50%程度なので、差がある。現職教員は、ICT をアクティブ・ラーニングに道具として活用できると考えている。

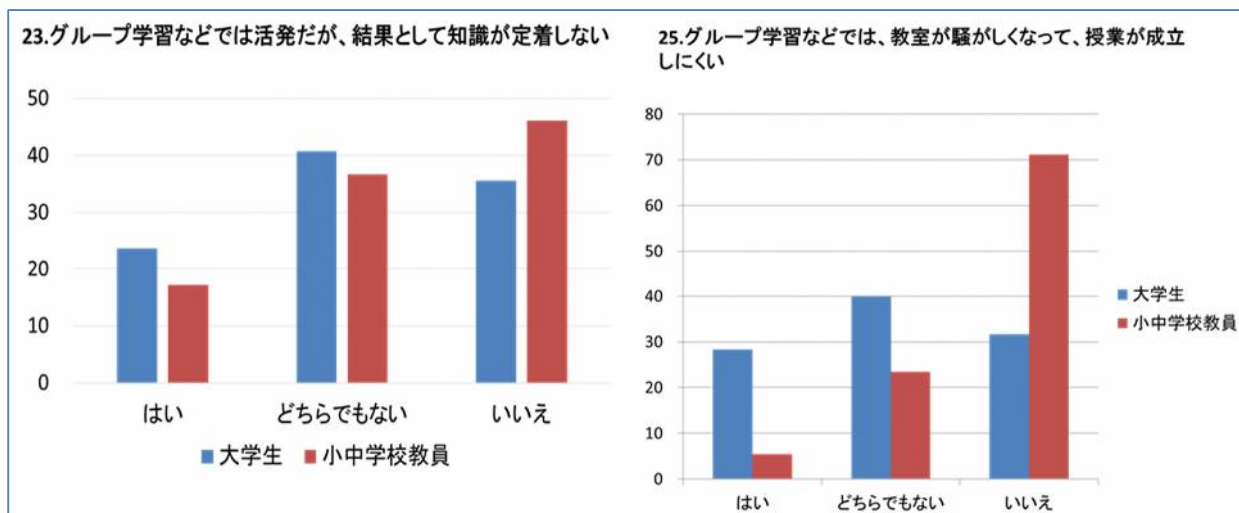


図4 23. グループ学習などでは活発だが、結果として知識が定着しない
25. グループ学習などでは、教室が騒がしくなって、授業が成立しにくい

これらの項目は、アクティブ・ラーニングについて否定的なアンケートであるが、知識の定着では、大学生および現職教員ともに、あまり肯定的ではない。図2で示したように、探求心や思考力を育てる上で効果的と考えているので、知識の定着とは別と考えている。また、図2ではアクティブ・ラーニングは授業の活性化に役立つと答えたが、逆に授業が成立しないのではないかと問う項目には、大学生は、どちらでもないという回答が多く、現職教員は、いいえと答える回答が多かった。現職教員は、大学生よりも、アクティブ・ラーニングをかなり高く評価していると言える。

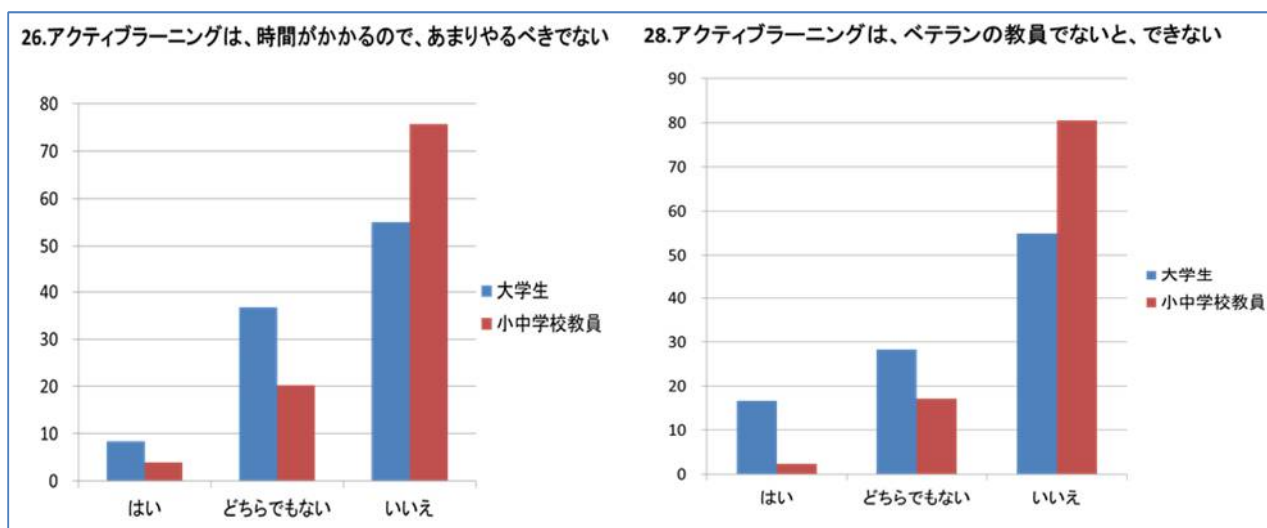


図5 26. アクティブ・ラーニングは、時間がかかるので、あまりやるべきでない
28. アクティブ・ラーニングは、ベテランの教員でないと、できない

図5の項目も、アクティブ・ラーニングに否定的な問いであるが、大学生と現職教員共にアクティブ・ラーニングを肯定する回答が多かった。

以上、大学生の回答と現職教員の調査をまとめると、以下の通りである。

- ①アクティブ・ラーニングは、授業が活性化し、思考力の育成に有効である。
- ②しかし、知識の定着には、適合しない。

- ③大学生よりも、現職教員の方が、期待感が大きい。
- ④ICTは、アクティブ・ラーニングに有効だと期待している。
- ⑤アクティブ・ラーニングの授業の実施は、難しくない。

以上から、現職教員は、実際に児童生徒を前にして教壇に立っている立場であり、過去の経験である小中高等学校を振り返って回答した大学生とは立場が異なり、現職教員の回答は、この意味では、信頼性が高いと言える。これから、アクティブ・ラーニングは、現場では受け入れられる授業方法だと、結論づけられる。

3. 2 アクティブ・ラーニングと印象に残る授業

アクティブ・ラーニングは、学習指導要領の記述に関わらず、教育改革の担い手の1つとして注目されている授業形態と言っても良いが、アクティブ・ラーニングを受講した児童生徒が、そのねらい通りに、内容の理解や探求が深まったのか、学習への動機付けや意欲に効果的だったのか、については、まだ分析が不十分と思われる。

そこで、本研究では、大学生に、小学校から高等学校までに受けた授業で、最も印象に残った良い授業を振り返ってもらい、さらに、最も印象に残った嫌な授業も振り返ってもらった。学生は、過去を振り返って、自由記述で回答してもらったので、アクティブ・ラーニングを特に意識していない。その内容を質的に分析した。

最も印象に残った良い授業と、アクティブ・ラーニングとの関連性が強ければ、アクティブ・ラーニングは優れた授業方法と言える。逆に、アクティブ・ラーニングとの関連性が低ければ、優れた授業方法とは言えない。その結論は、過去の膨大な授業の中から選択したのであるから、信頼性は高いであろう。

そこで、「29. 小学校から高等学校までの教室での授業（校内を含む）の中で、最も印象に残っている良かった授業について、1つ以上書いてください。それが良かった理由や好きになったきっかけも書いてください」の質問項目に対して、自由記述で書いてもらった。この自由記述を、質的に分析して、「アクティブ・ラーニング（グラフではALと略す）の授業」と「アクティブ・ラーニングではない授業」と、「どちらとも言えない」の3つに分類して、頻度を求めた。その結果を、図6のグラフに示す。

このグラフから明らかなように、最も印象に残っている良かった授業では、アクティブ・ラーニングの授業は、そうでない授業と同じ頻度ではないことが、読み取れる。但し、すべてアクティブ・ラーニングの授業が良いというわけではなく、その頻度を比べると、60%程度がアクティブ・ラーニングに関連し、40%程度は関連しないという結果であった。この結果は、興味深い。

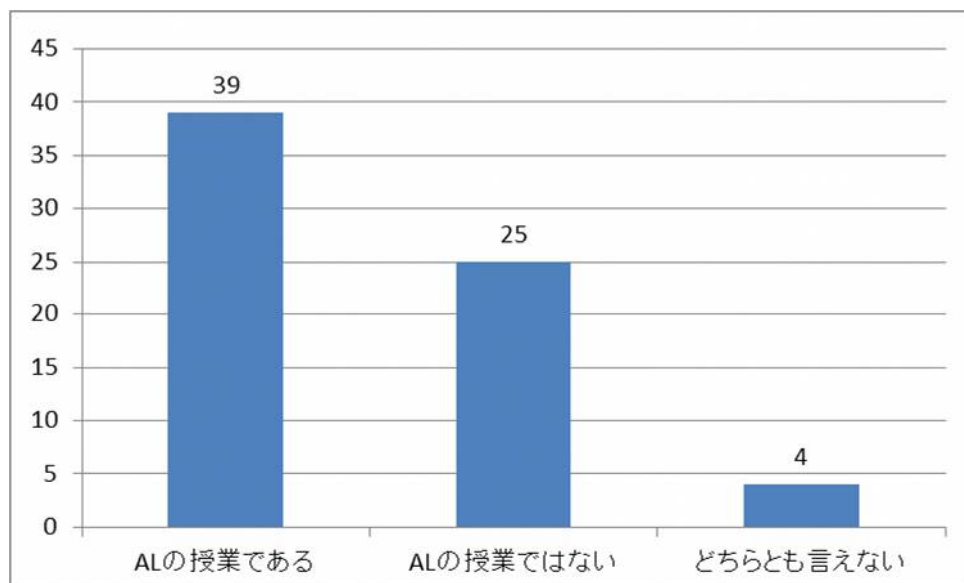


図6 最も印象に残っている良かった授業についての頻度
 なお、数字は、回答の実数を示す

具体的な自由記述例を、以下示す。

事例1 (アクティブ・ラーニング)

「小学校時代の自分の街を知ろうという授業。グループで外に出て、近くの川にあるいくつもの橋の名前の由来を調べた。自分で決めたことを調べられたので、進んでできたし、友達と一緒に歩きながらできたのでとても楽しかった。」

事例2 (アクティブ・ラーニング)

「高校3年で受けた、模擬投票。理由はそれまで、政治という分野に授業以外でしか触れなかったが学んで、どういうものかを知った時に自分も選挙権を得たらどういうことを国政、都政、自治体に意見をしていくのかを考えるきっかけになったから。」

事例3 (アクティブ・ラーニングではない)

「地理の先生の旅行体験談。エジプトでお金を盗られた話、イギリスのパブで仲良くなった人とペンパルになった話、ドイツでビールが水より安かったから飲みまくったらお酒が強くなった話など、海外の面白い話がたくさん聞けて外国に興味があった。」

事例4 (アクティブ・ラーニングではない)

「小学三年時に村岡先生が食の大切さと食べ残しをしてはいけないことを道徳の授業で学んだことです。現代における食の大切さは食の自給率の低さと発展途上国の餓死に密接していることにつながったからです。」

次に、最も印象に残った嫌いな授業についての質問に対する回答を示す。

「30. 小学校から高等学校までの教室での授業（校内を含む）の中で、最も印象に残っている嫌いだっ授業について、1つ以上書いてください。それが嫌いになった理由やきっかけも書いてください。」の質問項目に対して自由記述で回答してもらった。その回答の内容を分析して、担当教員の性格などによるもの、自分が苦手で不得意なことによるもの、授業方法が一方的などによるもの、アクティブ・ラーニングであることによるもの、に分類して、頻度を求めた。それを、図7に示す。このグラフから明らかなように、同じ頻度ではない。つまり、それぞれの原因の頻度に、意味があると言える。最も高い頻度は、授業方法が一方的などによるもので45%程度、担当教員の性格などによるものが26%、アクティブ・ラーニングであることによるものが9%程度あることも、興味深い。

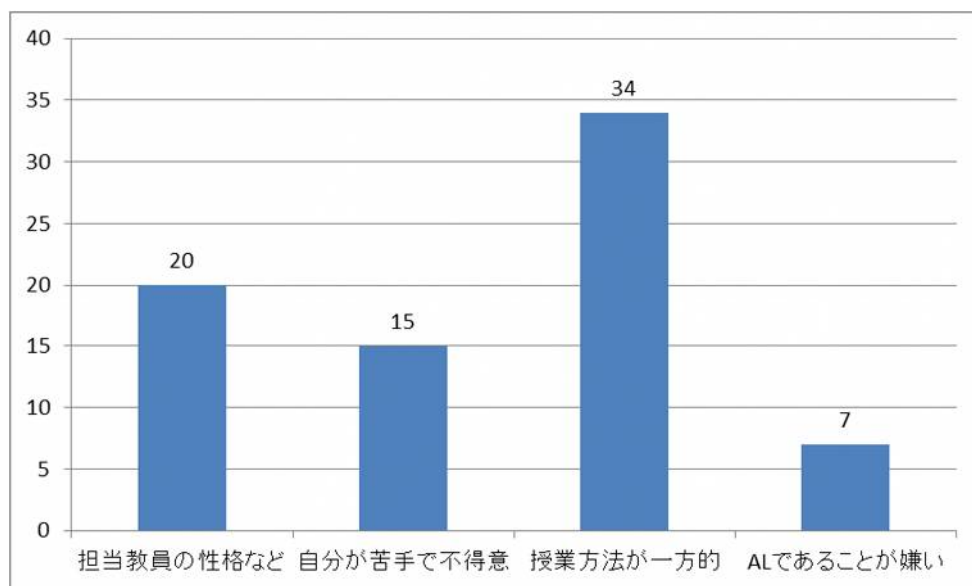


図7 最も印象に残っている嫌いな授業についての頻度
なお、数字は、回答の実数を示す

具体的な自由記述の内容を、以下に示す。

事例5 (担当教員の性格など)

「中学校の英語の授業。先生がタバコ臭く、感情的になりがちで、よく怒っていた。先生が嫌いになり、授業もあまり楽しいと思えなかった。」「中学一年生の時の、数学の授業です。分からないところを質問すると、「どうしてわからないのか。」と怒られたからです。」

事例6 (自分が苦手と不得意なことなど)

「マラソン 体力の有無は生まれつきもあると思うから、ビリくらいになった時にガン見されて辛いし体力的にも精神的にも辛かった。」「図画工作です。個人的に嫌いだったため。一度嫌いと思ってしまったら回復は難しいのでは。」

事例7 (授業方法が一方的など)

「板書がやたら多いのと先生が一方的に長々と話している授業。生徒にとっては退屈で眠いだけ。」「高校の古典の授業。ただ原文を現代文に訳すだけで、作品の面白さなどの解説がなく、古典に興味を持てなかった。」

事例8 (アクティブ・ラーニングであることなど)

「グループワーク。人見知りということもあり、人と話し合いをするのがあまり得意ではなかったし、自分の考えを述べるのが苦手だったので、この授業は嫌いだったし、毎回早く終わってほしいと思っていた。」「討論の授業が好きではありませんでした。もともと勝ち負けを決めるものが好きではないです。意見は人それぞれもっていて良いと思うし、それを口に出して言うことも悪いことだとは思いません。ただ、相手の意見を無理に変えようとするのに対しては疑問を感じています。」

以上をまとめると、アクティブ・ラーニングの授業は、小中高等学校の授業を振り返った結果、最も印象に残った良い授業の60%程度を占めており、他の授業方法に比べて、有意に高い。また、最も印象に残った嫌いな授業では、多様な原因が抽出されたが、中でも一方通行的な授業方法は、他の要因よりも、45%と高い割合を示した。但し、9%程度は、

アクティブ・ラーニングの授業が原因としている。

4. 結論と考察

以上の調査から、いくつかの知見を、以下のようにまとめる。

- (1) 今日の大学生の特性として、
 - ①自分を反省する大学生が多い。
 - ②講義形式やグループ活動という形態よりも、知的な内容を好む。
 - ③この意味では、テーマに興味を持たせて、知的に引き付ける教員を好む。
- (2) 大学生と現職教員の比較調査では、
 - ④大学生よりも、現職教員のほうが、アクティブ・ラーニングへの期待感が高い。
 - ⑤アクティブ・ラーニングは、思考力を高め、どの教員でも実施できる。
 - ⑥アクティブ・ラーニングには、ICTは有効な道具である。
- (3) 小中高等学校で、最も印象に残った授業では、
 - ⑦最も印象に残った良い授業では、約60%が、アクティブ・ラーニングに関連している。
 - ⑧最も印象に残った嫌いな授業では、一方通行的な授業方法が原因であるとしており、45%と最も高い。

以上から、アクティブ・ラーニングは、授業形式というよりも、いかに児童生徒・学生を授業に能動的に参画させるかの授業方法であり、それは、最も印象に残った良い授業として、学習する側に伝わっている。但し、授業の良さには、教員の性格や特性、内容についての学習者の得意・不得意、授業方法などが、絡んでおり、簡単に結論付けることは難しい。大学生が小中高等学校を振り返って、最も印象に残った良い授業として、60%がアクティブ・ラーニングに関連していることは、自由記述の回答の分析から得られた結果であり、興味深いと言えよう。

最後に、本小論は、NPO 教育テスト研究センターの支援と、科学研究費助成金・基盤研究 C (代表、赤堀侃司、課題番号 15K01034) の支援を受けたことを明記して、厚くお礼申しあげる。

参考文献

- 赤堀侃司 (著)、池田利夫 (編集)、タブレット教材の作り方とクラス内反転学習、ジャムハウス、2015
- Bonwell,C.C. and Eison,J.A., Active Learning: Creating Excitement in the Classroom, ASHE-ERIC Higher Education Report No. 1, The George Washington University, 1991,p.2. <http://files.eric.ed.gov/fulltext/ED336049.pdf> (2017年4月3日現在).
- ジョナサン・バーグマン, アーロン・サムズ (著), 山内祐平, 大浦弘樹 (監修), 反転授業、オデッセイコミュニケーションズ、2014
- 中学校学習指導要領 (文部科学省「次期学習指導要領 (平成 29 年 3 月公示)」)、
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-icsFiles/afieldfile/2017/03/31/1383995_3_1.pdf
- 中央教育審議会、新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申) 用語集、(平成 24 年 8 月 28 日)
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf

赤堀 侃司

マイケル・B・ホーン, ヘザー・ステイカー (著), 小松 健司 (翻訳)、ブレンディッド・ラーニングの衝撃、教育開発研究所、2017

国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター、「高校生の生活と意識に関する調査報告書 -日本・米国・中国・韓国の比較」平成 27 年 8 月

http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/98/ (2017 年 4 月現在)

松下佳代編著, 「ディープ・アクティブ・ラーニング」勁草書房、2015

小学校学習指導要領 (文部科学省「次期学習指導要領 (平成 29 年 3 月公示)」)、

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-icsFiles/afieldfile/2017/03/31/1383995_2_1.pdf

山本崇雄 (著), 「なぜ「教えない授業」が学力を伸ばすのか」、日経 BP 社、2016